

「働く若者のボランティアキャンプ」

第1回 平成25年7月13日(土)～15日(祝)2泊3日

第2回 平成25年9月28日(土)～29日(日)1泊2日

第3回 平成25年12月14日(土)～15日(日)1泊2日



I 事業の背景(必要性)

「第8次勤労青少年福祉対策基本方針」(厚生労働省:2008.10)では、今日、青少年の社会体験が少なく、集団活動に消極的であったり、集団活動そのものになじめない青少年の問題が指摘されたりしているが、こうした青少年にとって、他人との共同生活を送りながら社会活動等へ参加することは、他人と交わりコミュニケーション能力を高めるなど、社会性の涵養に繋がるとされている。

また、勤労青少年が自由時間を活用し、ボランティア活動等の社会活動に参加することで、職場や社会の一員であることの自覚を深めるとしており、「子ども・若者ビジョン」(子ども・若者育成支援推進本部:2010.7)においても、若者の社会形成・社会参画支援のためにボランティア等の社会参画活動の推進を図ることを基本的な方向として示すなど、青少年がボランティア活動を行うことは、社会参加意欲を高める上で有用な方法としている。

そこで、中央交流の家では、勤労青年の社会参加意欲を高めるプログラム開発を目的に、本事業を実施した。

II 事業の概要

1. 趣旨

- (1) 被災地や一人暮らし高齢者宅でのボランティア活動を通して、青年が達成感や自己有用感を得て自信を持つとともに、「共助・公助」といった地域社会の在り方について考える。
- (2) 青年による社会活動への参加が、地域には必要とされていることに気づき、地域社会への参加意識を高める。
- (3) 新しい仲間と出会い語り合い、余暇時間の活用について考える場とする。

2. 参加者

(1) 対象・募集人数

働く若者20名(概ね18歳～35歳)

(2) 参加状況

<第1回:被災地支援ボランティア活動～南三陸町～>

年齢	男性	女性	合計	地域	職業
20～30歳	6	10	16	静岡県御殿場市・小山町・三島市・沼津市・裾野市・熱海市・富士市・富士宮市・静岡市・島田市、神奈川県横浜市、東京都中野区、長野県松本市	会社員(9)、理学療法士(3)、技術職(3)、看護師(2)、金融業(2)、ホテル・旅館業(2)、公務員(2)、自衛隊員(1)、郵便局員(1)、パート職員(3)
31歳以上	9	3	12		
合計	15	13	28		

<第2回：地域支援ボランティア活動～一人暮らし高齢者宅支援訪問～>

年齢	男性	女性	合計	地域	職業
20～30歳	2	4	6	静岡県御殿場市・三島市・沼津市・裾野市・熱海市	看護師(2), 技術職(2), 郵便局員(1), 金融業(1), 会社員(1), 介護士(1)
31歳以上	2	0	2		
合計	4	4	8		

<第3回：地域支援ボランティア活動～一人暮らし高齢者宅支援訪問～>

年齢	男性	女性	合計	地域	職業
20～30歳	4	5	9	静岡県御殿場市・小山町・三島市・沼津市・熱海市・富士宮市・島田市, 長野県松本市	看護師(2), 会社員(2), ホテル・旅館業(2), 理学療法士(1) 地方公務員(1), 技術職(1), 金融業(1),
31歳以上	0	1	1		
合計	4	6	10		

(3) 広報の方法

- ① 募集チラシを作成(申込書添付)
- ② 御殿場市を中心とした従業員が概ね100名を超える企業に配付
- ③ 静岡県内勤労青少年ホーム及び勤労者福祉サービスセンターに配付
- ④ 近隣市町村役場, 近隣社会福祉協議会, 県内図書館の情報コーナーへの掲示依頼
- ⑤ 報道機関への事業掲載依頼
- ⑥ 交流の家ホームページに掲載

3. 日程

(第1回 「被災地支援ボランティア活動」)

7月 13日 (土)	8:00		12:00		17:00		20:00		21:30					
	交流の家 出発	出会いの ゲーム(車中レク)			花山青少年 自然の家着	夕食 入浴 休憩		被災経験者から の講話						
7月 14日 (日)	6:30		8:30		12:00		16:00		18:30		19:30		21:30	
	自然の家 出発	南三陸町でボランティア活動				移動		夕食 入浴 休憩		活動の振り返り				
7月 15日 (祝)	9:00		12:00		18:00									
	自然の家 出発	バス移動 ※途中, 昼食・休憩				交流の家着 (解散)								

(第2回 「地域ボランティア活動」)

9月 28日 (土)	14:00		14:15		15:45		17:30		20:30		21:00				
	交流の家集合			オリエンテ ーション	介護士・看護師か らレクチャー・実 技指導	職人から レクチャー ・実技指導	野外炊飯		入 浴	語り合いの場 (ログハウス)					
9月 29日 (日)	7:00		9:00		14:00							14:30		15:00	
	こ い	朝食・ 清掃		高齢者宅でボランティア活動 (昼食含む)			移 動	活動振り返 り(交流の家 で)		(解散)					

(第3回 「地域ボランティア活動」)

12月 14日 (土)			14:00	14:30	15:40	17:30	20:30	21:30	
	交流の家集合			オリエンテーション	清掃のコツを実習を通して学ぼう	職人からレクチャー・実技指導	みんなで夕食をつくろう	入浴	語り合いの場 (ワークキャンプハウス)
12月 15日 (日)	7:00	9:00	13:00		14:00	14:30			
	朝のつどい	朝食・清掃	高齢者宅でボランティア活動(昼食含む)		移動	活動振り返り(交流の家で)	(解散)		

4. 内 容 (活動の様子)

第1回 被災地支援ボランティア活動 7/13~15

(1) 「バス移動 (1日目)」

- ① 9時間におよぶ長時間のバス移動中には、自己紹介、レクリエーション、途中サービスエリアでの休憩ごとに席替えをすることで、初めて会う仲間との交流を図り、南三陸町に到着する頃には、互いに自分自身のことを語り合うような関係を築くことができた。
- ② 車中では明るい雰囲気青年たちだったが、バスが南三陸町に入り、想像以上の震災の被害を知ったことで、明日のボランティア活動に対しての不安が募り、重い雰囲気であった。



【バスでの人間関係作り】

(2) 「被災経験者からの講話 (1日目)」

被災時に石巻市立大須小学校教頭として大須小学校避難所の運営に携わった、現国立花山青少年自然の家の職員から震災時の様子を映像を交えながら講話を聞いた。青年たちからは、「実際に津波や震災を経験した人から直接聞く話は、私たちにテレビを通してでは伝わらないたくさんの苦労や我慢があったことを教えてくれた。それらは非常に辛いことだが、その中で人の強さや温かさの話を聞き、私たちが力がもらうことできた。」等の感想が聞かれ、明日のボランティア活動への意欲を高めることができた。



【被災者からの講話】

(3) 「南三陸町での農地復旧ボランティア (2日目)」

- ① 朝8時45分、南三陸町災害ボランティアセンターで受付を済ませた。ボランティアセンター前にあるベイサイドアリーナで、被災時の様子を写真で見たり、被災者が書いた詩を読んだりし、青年たちは改めてボランティアの必要性を感じ、活動への意欲を高めた。
- ② 農地復旧ボランティアを行った場所で、ボランティアセンターのスタッフから、「農地復旧のボランティアは、ただ農地を元の状態に戻すのではなく、農業従事者に生きがいを与えることが目的」との説明を受け作業を開始した。青年たちが取り組んだ作業は、津波により被害を受けた農地で、既に重機で農地の60



【被災地の写真や被災者の詩】

～70cmほどの土砂がかき出された後の細かな瓦礫や石を、スコップやピックルなどを使いながら取り除いていくものであった。青年たちからは、「農地復旧ボランティアをする場所については、石ころ拾いなんてすぐに終わると思いましたが、一日みんなでやっても畑の半分もできませんでした。復興には膨大な時間・労力がかかると改めて感じました。」等の感想が聞かれた。



【農地復旧ボランティア】

- ③ 作業終了後、集めた石が入った大きな袋の前で、ボランティアセンターのスタッフから「今日の皆さんの頑張りがこの町の復興に向けて大きな力となった。」と感謝を伝えられると、みんなで頑張りを称え合い達成感と充実感を得た。

(4) 「キャンプ全体の振り返り (2日目)」

『ボランティア活動の振り返り』と『自分の周りにある社会が抱える問題についての話し合い』を行った。前半の『ボランティア活動の振り返り』では、一人ひとりがボランティアを通して気付いたことや考えたことを発表した。後半の『自分の周りにある社会が抱える問題についての話し合い』では、グループになり「個人で(解決)できること・国や社会でしか(解決)できないこと・自分のため・社会のため」の4つの軸で意見を出し合った。「一人暮らし老人の増加」、「近所付き合いがなくなってきている」などの意見も出され、青年たちの視線を、被災地から本事業の趣旨である地域社会へ移すきっかけを作ることができた。



【自分の周りにある社会が抱える問題についての話し合い】

(5) 「バス移動 (3日目)」

南三陸町を後にするバスで青年たちの中には、「また必ず仲間を連れて戻ってくる。そして、自分たちにもできる復興のための活動をする」と力強く訴える者もいた。青年たちにとってわずか3日間であったがボランティア活動への意欲を高めることができた。

第2回 地域ボランティア活動 9/28～29

(1) 「青年たち(参加者)の職業を活かした講義」

- ① 参加者の介護士から「高齢化社会」の講義を受けた。前半は日本が直面している一人暮らし高齢者問題の現状を学び、後半は高齢者の在宅介護と施設介護の良い点悪い点を参加者全員で議論した。
- ② 参加者の看護師から、前半は老人の便がなぜ出にくいかなど高齢者の体の仕組みを学んだ。後半は、病院で看護師が注意している高齢者とのコミュニケーションの5つの方法を学んだ。

(2) 「職人からボランティアで活かせる技術を学ぼう」

地元の造園士から高齢者宅のボランティアで役立つ庭の手入れ方法を学んだ。青年たちの大半が剪定ばさみ・刈り込みばさみ・枝切りのこぎりをほとんど使った経験がなく、職人から教わった方法で所内の木や植木を剪定し実践練習を行った。



【介護士から高齢者について学ぶ】



【看護師から高齢者について学ぶ】

(3) 「野外炊事」

夕食は食品関係に勤務する参加者が講師となり、食材の効能を説明し、野外炊事を行った。調理や食事をしながら、同世代の仲間と語り合うことで他人の考えを理解し、自分自身の価値観を再考する機会とした。

(4) 「一人暮らし高齢者宅でのボランティア活動」

2日目は一人暮らし高齢者宅を訪問し、高齢者との会話を楽しみながら前日に学んだ技術を活かし庭の剪定を行ったり、部屋の清掃を行ったりした。青年たちからは、「いつも自分がやっていること（掃除）で喜んでいただけるなんてとてもうれしかったです。このような活動があることをもっと広めていくことが大切だと思います。」「喜びを得る体験はいろいろあると思いますが、一人暮らしの高齢者宅でのボランティアで喜びを味わうことができ、今回ボランティアに参加して良かったです。」等の感想が聞かれた。



【高齢者宅で枝きりをしている様子】

第3回 地域ボランティア活動 12/14～15

(1) 「青年たち（参加者）の職業を活かした講義」

清掃業に従事している参加者から、プロが行っている窓拭き技術について学び、所内の窓拭き等の実践練習をした。普段家庭で行っている窓拭きとは違う方法で行い、どの角度から見ても全く汚れがない窓を見て参加者は驚きの表情を見せていた。

(2) 「職人からボランティアで活かせる技術を学ぼう」

地元の建具職人から、障子の張替え方法と網戸の張替え方法を学んだ。参加者からは「網戸や障子を自分で張り替えられるなんて思っていなかったので、自分でできた達成感は大きかったです。明日の高齢者宅でのボランティアの自信になりました。」「やったことのない障子の張替えや網戸の張替えが自分でできました。今回のボランティア以外にも祖父の家でもやってみたい。」等の感想が聞かれた。



【職人から網戸の張替えを学んでいる様子】

(3) 「夕食作り」

夕食は食品関係に勤務する参加者が講師となり、食材の効能を説明し、作業を分担して調理を行った。調理や食事をしながら、同世代の仲間と語り合うことで他人の考えを理解し、自分自身の価値観や余暇の過ごし方を再考する機会とした。

(4) 「一人暮らし高齢者宅でのボランティア活動」

2日目は高齢者宅を訪問し、高齢者との会話を楽しみながら前日に学んだ技術を活かし窓拭きや部屋の清掃を行った。青年たちからは、「高齢者の方に喜んでもらい、この上ないものを得ることができました。」「これまで一人暮らしの高齢者の方が、何に不便を感じ何を求めているかまで考えることができませんでしたが、今回のボランティアをきっかけに一人暮らしの高齢者に必要な支援について、自分ができることをもっと考えていきたいと思います。」等の感想が聞かれた。



【高齢者宅で窓拭きをしている様子】

5. 評価

(1) 評価の方法

参加者全員にアンケートの実施

(2) 結果

① 第1回被災地支援ボランティア

ア. 事業全体をとおしての満足度

満足・・・・・・・・・・18人(64%)

やや満足・・・・・・・・・・10人(36%)

- ・【満足】被災地の現状を自分の目で見て、被災地のために少しではあるが貢献できた。
- ・【やや満足】一日ボランティアしても、あの小さな畑の石ころ拾いすら終わらなかったのが悔しかった。

イ. 自由記述

- ・被災地支援ボランティアはやりたいと思っているだけで行動に移せない人はたくさんいると思います(私もその一人でした)。今回思い切ってボランティアに参加することでたくさんのかんじをかんじました。私なりに今回の被災地ボランティアで感じたことをみんなに伝えていき、社会にはボランティアが必要だということを広めていきたい。
- ・年齢も職業も違う人達と一緒にボランティアキャンプで語り合ったことは、今後の人生について考える機会になりました。

② 第2回地域ボランティア活動

ア. 事業全体をとおしての満足度

満足・・・・・・・・・・6人(75%)

やや満足・・・・・・・・・・2人(25%)

- ・【満足】ボランティアの中で人の温かさを感じる場面が多々あり、人と人とのつながりはいいなと感じました。
- ・【やや満足】ボランティアの時間が足りなかった。

イ. 自由記述

- ・ボランティアをすることで自分が成長していることを実感できた。
- ・前回(第1回被災地支援ボランティア活動)に続き参加しました。違う職業の人と話すことで今回も視野が広がり、自分を違った角度から見つめることができました。

③ 第3回地域ボランティア活動

ア. 事業全体をとおしての満足度

満足・・・・・・・・・・9人(90%)

やや満足・・・・・・・・・・1人(10%)

- ・【満足】ボランティア前日に行った窓拭き実習のおかげで自信を持って当日ボランティアを行うことができた。
- ・【やや満足】第1回から参加しているため軽い気持ちで参加してしまった。次回ボランティアに参加する際には目的意識をしっかりと持って臨みたい。

イ. 自由記述

- ・今後、私たちは超高齢化社会を生きていくことになります。あと50年もすれば私も今回訪問したおばあちゃんのように一人暮らし高齢者になる可能性があります。私たちがボランティアで一人暮らし高齢者宅を訪れたように、周囲の人が高齢者となつながりをもっていくこと・気にかけていくこと等の気持ちをしっかりと持っていけば、超高齢化社会に私達は対応していけると感じました。

Ⅲ 事業の企画と運営

1. 企画のポイント

- (1) 第1回は南三陸町での被災地支援ボランティア活動を通して、ボランティア活動への興味・関心や活動意欲を高める機会とした。その経験を基に、第2回・第3回では、御殿場市の一人暮らし高齢者宅でのボランティア活動を実施することで、身近な地域でのボランティア活動の必要性に目を向けさせた。
- (2) 第1回のプログラムには、東日本大震災は、実際どんな状況であったか、どのように避難したか、復興に向かっていくにはどのようなことが大切かを知るために、被災者の講話を聴く時間を組み込み、青年たちの防災意識を高められるようにした。
- (3) 第2回・第3回の地域ボランティア活動では、初日にボランティア活動で役立つ技術を学び、青年たちが自信を持ってボランティア活動に臨めるプログラム構成とした。
- (4) 参加者の青年たちが自分たちの仕事を活かして講師になることで、地域社会に自分たちの仕事が役立つことを認識できるようにプログラムを組み立てた。
- (5) すべてのボランティア活動終了後には青年たち全員の考えを共有する時間（振り返りの場）を設定し、ボランティア後の過ごし方について、自らを見つめ直す機会を設けた。その活動によって青年たちの自主的な地域社会への参加意識を高められるようにした。

2. 運営のポイント

- (1) 第1回の被災地支援ボランティアでは、より良い人間関係を築くために事前に書いてもらったプロフィールをしおりに掲載し、青年たちがお互いのプロフィールを読むことで相互理解を深めることができるようにした。また長時間のバス移動ではサービスエリアごとに席替えを行ったり、さまざまなレクリエーションを行ったりし、より多くの参加者と話をする場を設定した。
- (2) 第1回の被災地支援ボランティアでは、ボランティア活動を行う前に看護師から熱中症対策についての話をしてもらい、青年たちの安全確保の対策をとった。
- (3) 第2回・第3回の地域ボランティア活動で訪問する一人暮らし高齢者宅を探すために、社会福祉協議会や地域安全推進委員の方に協力を依頼した。また、事前打合せで各訪問先で支援を必要とするボランティア内容を確認し、青年たちはそれぞれ自分の持っている能力を活かせる場所を選び訪問した。

3. 成果と課題

(1) 成果

- ① 被災地支援ボランティア活動に参加することを通して、東日本大震災が実際どんな状況であったか、人々はどのように避難したか、復興に向かっていくにはどのようなことが大切なのか理解することができ、青年たちの防災意識を高めることができた。
- ② 被災地支援ボランティア活動を通して、地域社会が抱える問題に参加者の視線を向けるきっかけを作ることができた。
- ③ 一人暮らし高齢者宅ボランティア活動での高齢者との関わりの中で、地域の中で青年たちが必要とされていることに気づくことができた。
- ④ ボランティア活動を通して、青年たちは感謝されることで達成感や充実感を得た。
- ⑤ 職業や年齢が違う人と語り合うことを通して、自身の仕事や日常の生活の過ごし方

について見つめ直すことができた。

(2) 課題

- ① 被災地を支援するボランティア活動に参加した青年たちが、自分たちの周りの地域社会への関心・参加意識を高めるのに有効な手立てをさらに探っていく必要がある。
- ② 一人暮らし高齢者宅の中で、ボランティアの受け入れが可能な家庭を見つけるために、一人暮らし高齢者が抱えているニーズと青年たちの希望を踏まえたボランティア活動の受け入れ先を調整していく上で、関係機関とのさらなる連携が必要である。

担当：高島毅，柴田勝好，中村匡寛